夫木和歌集巻二十二

雑四

和書門 類 二五五五五號 一一二函 八架 三六冊

内閣文庫 和書 類 二五五五五號 三六冊 二〇〇函 二四架

内閣文庫		
番號	和	25555
冊數	36	(22)
函號	200	215

国立公文書館 National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

夫木和歌抄巻第二十二

雑部四

題

野　原　林

杜　牧　田畠

園　畑　巌

石　細砂

日本政府圖書

淺草文庫

野

建保二年内裏詩歌合野外霧　前中納言定家

松の露さえしねやいつこ哀れ今も
秋の野くは霧りこそ

寛喜入内京極摂政家百首

萩か葉つゆ都の野への打なひきて
花ならて拾ふなれこそ月の白露

同

六帖新古

見渡せは野辺もはるかに霞たつのへ

信実朝臣

縁くもよそに草花多かる

新葉

里人の尺ねかさいねさめてなるて
むすひむもて拾ふ野への加わる

祇園社百首　皇太后宮大夫俊成

野へはされ清きのそらへのいまはそと
たれ見野へより野への尽(?)りけれ

晩膳　白雲深　千里

かゝりとて野への遥けく消ゆれは

立白雲も深くなりにける

題しらす　前中納言匡房

つゐにいかにそむくへき万代乃

時人のなかよはしりては

元永元年十月内大臣家歌合　右大弁　源経信卿

万代の中にも君はいむしとも

心をはよそにねかりそまさける

寛治元年七月[illegible]の山家歌合

よもすから人しれは

いさしれ何の秋風にたちわかれ

雲のうへもあかれや時をしらす神

御前歌合　後九条内大臣

時のなしそ麻にかうもみちをたれ

たとの秋はよ月を見てみける

同御歌合中　右衛門

貞之親王雅

万代のなかれなのりそもて見ん河をは

秋はのみこそ時雨ふらめり

[illegible]のと北山殿

左大臣

幾とせもへいはいつくとのかけの

秋の紅葉を関りて見れは　　同

嘉集いくなめとの　摂津

もとされあのゝこゝろしも心なきす

せ田のかみわすれしの春

永久四年大膳大夫家歌合に己の人々いまそ物讃與

よみ人しらし

浦ともゝいつその野への花さき

まつのまゝりまちくゝ秋のゆふ暮

堀川院御時百首

澄源法師

こゝろなくよいつその野へにまて

千種の花はうらゝ見るらん哉

和歌所にて秋の歌よみ侍ける中に　洞院摂政

志井てうつりゆくゝいつれ

萩秋うつりまつりゝ霜かゝかしも

嘉応万大九　中納言家持

あさつけは萩咲すかいにせはよ

むさしのゝよるゆまて なをちらす

うつりかゝ立て玉ぬるとのうつし

ゆくらす

元久元年七月内大臣家歌合 暮苑禁中花 権中納言師俊

山のけ井てのまさける女郎花色ゆへ人のつまとなるらん

百首歌の中にいそれの太和 安嘉門院四条

あけしよりやいそれのあさら刈やまさきるとも

七夕百首中 いそれの帰 赤人

我太見のつまの(る)つま なかく恋まさ

いそのの太海の風れ あくらの

題しらす よみ人しらす

いそのかみあかしくて見れは花のこと

つなをあつめかしと時いさすまし

文明元年中 重之

いそのまそなつまもしくしつ本乃

まつ露しまゝ花かまよりかけり

家集宝治元年名所陽詩 後久我太政大臣

年へてもなひかやそとれのを野の

山よ志水りもしかそてる

家集　　　　　　鴨長明

いはみのゝ花乃なれてよるらり
あすのみ未はゆきつしるせ

建仁元年三月中　為家

あらしふく滿ちの浪をへだてゝも
又神かみらはいまその遊

建保元年秋詩歌合こゝろ花あさ
草花山家の色　　顕親朝臣

小倉山のみ入野のちくさみたれ
あけゆかるよる乾草の露まさり

久安百首　秋の　丹後　　待賢門院安藝

行くとも秋は生野の花すゝき
まねくは人の尚のうら風

應保二年百首　　正三位季經

いつくまてなくらんきりぎりす
尾上のけの草枕かな

建長八年百首歌合花北前大納言顕朝

秋萩しまする花野の花すゝき
まねく袂をふりすてゝけり

貞応三年九月名所百首　民部卿家

かりかゝる花野のすゑのまはきはら
みやきのゝ秋やしるらん

寛元々年万代うたのうちの歌　権中納言師俊

夏草乃なひきしかたのをしなへて跡
秋は都へひとんやすみそらん

建保三年内裏二百首歌　従二位範宗

月まつといひつる秋の小月はきえむ
いつれもいる山乃あきのあり

嘉禎元年晩聞寺里をよみ侍ける　喜多院入道二品親王

友鶴やさえくの声をあはれなるらん
寺の里をのかり雪のむしろにそ

新集聖覚花薫袖一字抄よみ侍ける　左京大夫顕輔

見れとあかぬ二色のをみなへし萩も
袖かりけるもるなくへなれし

新ら藤原家隆朝臣世の歌

あまを舟こきゆくをのは行人しれ
けふもくもゐに君かみるする

建長六年百首　光俊朝臣

おほ津浪さえて残るやあま小舟
こき分れ行あとにつもる白雪

百首御歌の中に大和　後鳥羽院御製

鶯のこゑのにほひの軒への雪中よ
そとめしとけりまかつ梅く

光明峯寺入道摂政家歌合月
こやのまつ　家隆

立かへり又もきそこし思ひ寝るれ
こやのとぬれ秋の夜の月

十五首歌合冬の山城　定家

菅なきや花くもる原のさめに
雨わし袖はと色まさりゆく

題しれ言幸元中　好忠

冬さこれたゞのくつもるを見渡せは
めぐる色ちらくよあさ見えなり
さしれよる人しもを

冬木りしのくさのつもるをさかれと
あまをる人の遠しうらん

内大臣家百首歌に　為相

うつろふ色も紅葉の山も見しにもあらて
惜しくもかれたる下かくるらん

宝治百首歌の中に　民部卿為家

あさちはらかれふのくさはよりもなを
ましろふ色なくつもる白雪

弘長元年十首歌に　よみ人しらす

わかよもあらかさのかりてかれにしを
あはれ八入のそめしつゆこそ

宿侍の人々院三十首歌奉りけるに　後嵯峨院御製

宿からむ人もなきこのゆふくれに
山もとさやかにあかれかるよも

同　従二位家隆

立のかりねの宿やかりの衣
そのゝ花袖をそれなり

建保三年名所百首　正三位

秋の色をそめてかへす高見渡せは
生駒の峯は時雨してけり

同

正三位知家

かりするかたのゝま柴風さえて
うす雪しろしならのこ原

貞應二年當座百首 野径 前民部卿為家

かりくらしかたのゝみのゝかりまくら
天の川霧たちかへるよのすゑかな

寶治百首 寄名所 土御門院小宰相

こゝを山ちるさくらりのゆふけや
かたのゝ雪はけふそきえなん

永久四年百首 雑 仲實朝臣

君かためちよをよはひと鶴そなく
一松ねのひ雛子なりけり

建保元年 新歌合 信實朝臣

夕立のはるゝかたのゝ松原や
あをくもそゝくむら雲の空

伊勢國 万六 川口野 家持

河口の野へにいほりてよのふれは
妹かたもとしおもほゆるかも

家集くれの冬の　清輔朝臣

中々にくるゝ乃冬のくなごりを
宿れさ見んと行けるまでん

新しく后七冬の哥　よみ人しらず

押そ舟さわひこゆるみなとの
ゝおれくらのくすきさしちふ

同万三　高市連黒人

いつくにか我宿りせむ高嶋の
かちのゝはらに此日暮しつ

寛元元年十一月一日中院亭の哥　為家

夜をふかきや板まのきしむさやかにて
續ゑし更ゆけは月のかげさむし

新しく后十三冬の哥　未勘　人丸

みくもとれりさのかきをわけくゝ
くるゝ道はまよへるて恵よまされる

建長八年百首哥合冬のうちの暁　未勘　法印実伊

ふかすつむ袖にうちとめさちる人
かりそめの雪はけあかし

西園寺百首歌よませ侍しに　参議為相

暮てもさそみれ世といひなやあはれなく
けふハむかしの跡にしのはん

将軍家百首御歌の中に　後九条内大臣

暮れつゝむともとふ人も絶ぬへく
はるくとみゆく雪ハしをりて

百首御歌のなかにふるさとの心を　藤原親為

ふるさとや夏ハしけりて草茂り
あれはてゝ宿を訪ふらん

宝治二年百首晩鶯よみけるとき　知家

色さへる里もこゝろに鶯の
けふみれはのこゑめれたそ

建保歌合に　衣笠内大臣

みよし野のかけ路のさくら霞みけり
下にかくれは知人もなし

同新歌蛙をよみける侍の心を　為家

知もしれ山吹にほふけふの
そのくかすみ下にも絶ぬもも

題しらす　万葉　小野老　大和　よみ人しらす
三吉野乃かはら乃をのにかりやの
ゐなくれてゆふしら波

永久二年右衛門督家歌合　女房宰相（女郎花）　同
見れとあかねこゝろれをのゝ女郎花
たちまよふはとまれ秋はゆくとも

題しらす　喜撰　大和　同
旅人乃宿はかれゆけるをの
ねはぬかりんとやまつらん

題しらす　同
あはれとも太しかして山人
まみあをも山ちとせの山人
かりまゝやむすめらん

同万　十六　小鯛王
夕されはかはつなく乃
尾花かすゑしらつゆのおきて

寛治宝…院兼…御歌合　兼儀雅
もえてはや咲ちる梅もはなかり

かりやまれたまつしまて

文永元年七社百首　為家

たつの日乃光にあれハ春日の

山鶯ましれりのこれ白雪

建長二年毎日一首中　同

けふの空をし道あるしとて千すの乃く

ら庭乃下枝まつりも蒼えよ

宝治歌合　権僧正道鶴

まなつるのなよ二葉のりかしまつるまし

けふ生れ野辺ハありまり

宝治歌合　しゝを

まの人〳〵しつをゝ

つるの野辺乃鶴井る雲の井ちくよ

もみハ慈まして月よ日こそり

同百首　同

鶴日ゆそ千すとれ小野まに霊寄の

きとめ〳〵さ我身ゆしゝもあ

延喜廿一年三月京極御息所歌合　同

千すの乃く松しつまちすいつ〳〵の

水乃流るゝ絶しとそ思ふ

歌集　萩花　とに又上野非河内　西行上人

萩咲よこれの流をれしあれハ

みれハくれゆく人のまなかり

宗祇諸国　よみの山城　武蔵

春秋も紅葉清りまり柳葉哉

色もかはして考れ流れは

夫木百首　よみの出羽　実清卿下

秋霧乃よつされ野への女郎花

こゝろもかりくれハ立ちくすらん

同六帖中将胡入道　上野　光緒卿下

露ふかくよるこそ入野の草の花

ぬるとしも衣みやしほるらん

新しられ百十七首　よみ人しらす

あか恵ハまさるしく秋し草の花

ぬれこそ入野の杉くし出しも

同

あゐつも野り立ちまよひあさの小萱

猶ゆくへよりは我思ひかな

元暦元年前太政大臣家歌合 玉田摂政
従二位家隆

雲はらふ月の木枯し吹く風さえ
玉田のこの月に霜をくなり

大嘗会悠紀方御屏風 玉鉾原
俊成

家さけきさ王原の萩さり
風ものとよする秋の野

内裏 御時西宮 歌合
後九条内大臣

いる月を波しかみんこゝろや老らく乃

月のよの小野をり秋はさいかならん

永久三年大納言家歌合
人

したふ人の[illegible]しなれ
さるよそれ月よきのかぜの影を[illegible]

[illegible]
ぬはこれ[illegible]のいか[illegible]の

寛喜元年七月ころの歌
同

かはりまれ月のまれ草の花ありて
さめはやしくとかりてくやしき

建保三年九月百首のうちに
順徳院御製

こゝろの園の花かぜよりふかれ

まくとお草まれの色をしかりける

正三位家衡

高円乃野への秋萩ちりぬとて
色なき露かりあらし吹なり

同　知家

高円の野への女郎の花さきさき
秋もまたこそまたしの風

元応元年十月亀山殿にて（かの山城万代）　大江文遠

見渡せは高野の萩やくるゝ秋

これ鳥かり咲まなかり

百首歌よみけるに　右近中将公衡

湊川よるの床すゝしと起ける
秋をつけの麻もすゝされ

久安百首歌の時　参議親隆

えちりとむ清かるの野への萩さかり
あやめしきのねにやそる残るん

新千載集のうへの尾張　法印長教

しら鶴これもなかきれ山のつきすみわ

これとも斗もゆれぬ草
嘉元二年百首よしの　前中納言定嗣
ひなりのかうしも野の秋風よ
たちやくもやわらの月かけさやけさ
日すかねまの本歌　光俊朝臣
なかねまの聖を朝りも山よりよ
ひのしねいもろく小舟
家集云　康元二年十一月毛詣
聖とよ云　不もくれハ西いね井

ありかりてねのとりしらさ
しらやよ白く雲れ
是ハ入ひれしりをといふを
こきくてよめるとそ
萱原英繁　むさし　信頼朝臣
むさしのゝあしの萩生をわけハ
末葉ふよわたうて霜ハ乃えてたり
建保四年内裏歌合　聖かあ　順徳院御製
世さしのやつれよしまく小下萩の

なりくらんかはむ露のむらさき

久安百首　　前大納言隆季

恋をねと袖ぞ露けきむさしの
あさしのしのすさきめる衣むそら

中千首　野萱　　土御門院小宰相

萱原よみぞわけしらんむさしのや
久ふ里の境乃萩や榛原

如輪法師

むさしのやよこ雲かゝむ明けぬよ

春乃出しきさはかへしまり

雑　野　六二

むさしの野に恋もあまたのかりう
くしむらさきの花なりけり

家集述懐百首　　清輔朝臣

むさしのゝはらの花の色を見つゝ

建保三年名所百首　　従二位家隆

むらくる時もなきさふる所
りいはれつ雨ぞふ風も定め根よ
いく夜かねすんむさしの原

月五十首　霧中風冷　寂蓮法師

かきねつき清ましらぬ武蔵野の
袖もたましよ志みをすゝき

秋の歌中に　後京極摂政

むさし野のちりをさ秋風の
浪もしほるぬさ袖しのは念

大嘗会歌　悠紀　従二位家隆

ふくかうねと紅山のむさしのハ
露かゝり衣よ遠き晴より

寛喜元年百首に　野　同

むさしのハ草のはらなれ山もなくまれて
いつかたも入るも月をさいつらね

光臺院入道二品親王家五十首　羈旅月　知家

むさし野ハ行末ちかくなりにけり
に秋うこ清る山なれの月

むさしのそかすのこゑのはてきるとも　法印寂信

武蔵野ハ山乃端しらぬなきま
すしのこる□ハ花をみてきる

続古今中 秋

東路乃あしからこえてむさしのゝ
山も見えねは月そいつるかな
　　　　後九条内大臣

続古今秋中

かりのゐる水よりこほりし武蔵野も
こほれ有明の浪かくれ下草

続古今五 むらさきの 玉文 山城
　　　　宮田王

あさ日はてもむらさきのゆかりあめのゆき
野てかるハこやもえ秋の袖かれ

文永七年毎月一首中 うちの山城　為家

小倉山夕いそきて出はれしこ
内野の色ハ蒼もてるまちり

弘長三年内裏百首 故殿下家 大納言家

宮は見く内の大野を見えれよ
駒山七世川駒なつむるか

家集 うちの 山城　小大君

氷生野のさはまきうたゝぬ[illegible]の
千載 井 りつゝ花あるらし

内集 うへの私泉　衣笠内大臣

雨はれて露吹風よとをなる
かへ野の萩のちりもみすさらん

寛元現存六 ち後地　明珠法師

宇多雨外野よよ米りを花こ心さよ
かんかりの花 名玉あさもうきれし

むらしナ 若衣うたの秋の大和ニまけてこゆかるのこの木秘ハたとへかくんへとも よき人ーします

堀川院御時百首 野井なすの 信康 基俊

むらしうし道とうぬれとまかり
ぬらてまゝしつとれ井なのかりける

二条院御時よまゝる百首 宮 明玉　刑部卿範兼

雪ふりて井なすのさゝ原くろへまて
もくはくくもしもこのうら風

百首御歌の中　土御門院御製

足跡をいまし我もとよも露持て
うらりめさ井なすの代原

正治二年后宮歌合 羇中暮　権僧正公胤

あなを山よりかゝ路まぬまゝりまなる
井なすのふし原宿はなくして

題しらす百首 太神宮 宗和よみ人しらす 源
花いねを取りふといそく太神宮まつる
うきさの袪乃神そ申すらん
文永元年 太上天皇 北條当代時 同 春哉 宗和
風まくまは中々も行あかりの
こゝろいつりしそいかりなりとは
嘉禎 御哥 中務卿親王 鎌倉
吹さやく松風をきゝあかりの
こゝろいつりしそ山しきをとめる

永久元年六月為源之遊或所歌合 宝草 源仲正
みかの浦乃あま人の下葉よつまなしや
もとよめし鶏も立まつしらん
元和元けうら山の人よめるに あやうさの山嵐 よみ侍ける 長能
大あらなのこ哉ある乃かよさしくを
見ん捨てりけい袖与寄けれ
建元二年 殿上歌合 十五日 源仲業
あはつらん人も寺北大あるよの
こ哉のく原乃かり留のころ

秋歌中　万代　　仲実朝臣

なかつきもそてにきえたるあきのよの
しのゝ原にうつらなくなり

元久元年宇治山寺野亭歌合山家の嵐　定家

山しろのくせのゝ原のしのすゝき
まねきあへぬ風のしるへか

吉き歌　夕くれの萩　　権僧正公猷

時うつるくるゝも秋をのゝさへかり
かり衣の萩をかさしにかへてく

正治二年　　正三位季経

ましはおりしくるゝ野ゝのをちこちに
雪ふかりしよりかゝるくれ

古き御歌　　後鳥羽院御製

秋はいぬふゝきの山の夕暮に
あさちふの色ぞかはりね

家集　ゆふくれの嵐　　桐模

くるゝもの山寒の氷やまけてや
むすひつくしまつありしもまさるらん

堀川院御時百首 萩歌 摂津守仲実朝臣

くさのはら ちりやかれぬ 錦ゆかれ
秋萩の人なりけり さをしかのなくらむ

道因法師

くさのはなの下にふしてうつろ
秋萩も あはれいかにおもひけり

題しらす 赤人

くさのゝ萩の古枝に おく露と
おりし常にもかりなむ人もかな

康保三年八月内裏前栽合によみ侍ける 右大将済時 山城

女郎花 くさ梅の折へのこのまゝは
人りちしるるとまりかなしかりけり

万葉集の歌 前栽歌 中務卿親王兼盛

雪清みそらの嵐の音さえて
矢田の原野は露わけぬなり

清水かあさ 在原親盛

萩しをる風この原野をそよかせは
末さへ風に秋なりけるかね

題しらす　懐中やまとからの歳　讀人しらす

山しなの於(?)からのはゝそ原のはら
朝かしをて人ありしそるへ

同万葉やそのゝ哥　同

君かあめしくこゝろしさけをやのによ
獨やのきんなかしかして

前中納言經任　俊頼朝臣

海くまれよるかなかりて木のえの
流りやりしゆそるかなけれ志こ草

永久四年鳥羽殿北面歌合　名所よりの哥　源經兼朝臣

玉葛さふまのに春はれ原荻あひて
まこしはなちきゝまもり

長承二年六月常盤大納言家哥合　常盤殿源　皇太后宮大夫俊成

夜くさも海のゝ萩原荻あひてこそ
渡る人はこゝろのまゝすれ

六百番哥合　旧恋　かりの　左大蔵卿家房

我恋はかりねの袖のそさくりくら
秋風ありてかへるこ[illegible]ね

百首哥に

慈鎮和尚

いそのかミふる野乃雪の[illegible]
みけろふしもの色そ[illegible]

宝治二年百首

太政大臣家 [illegible]

磯上ふる野のあさちか秋の[illegible]
[illegible]の宿てり風そよる月影

文永二年白河殿七百首野花

後嵯峨院御製

露とのミかかる[illegible]のゝ萩花
[illegible]

題しらす [illegible]の勤

よみ人しられ

かすかりの野辺にかりかふ白雪の
いろとるかとしも忘れ我かも

同しらすの[illegible]

月

春日野のまゝつりを忘れむとも
いつはいとしりはかりあつるかも

家集

従二位行家

春日野よそれやつこれてする
恋りとも忘れ[illegible]

堀川院御時百首哥に　匡房

濱風の吹上のはまのあさな〱
流よりくるよ玉そちりける

同御時哥中　後京極大臣

されはや吹上のはまのあさな〱
なかひく雲ゐ秋よりまかる濱風

建長五年五十首哥中の　松下の騎河　為家

風さゆるよしのゝもとの松のかけ
道野の尾花雪しそへつゝ

新集　野径月　家長朝臣

月よりもしのゝをさゝにいさよひて
清見か関のうらまくら

六帖題　権僧正公朝

あくれともしのゝをさゝのかけにある
麻子ますらかはのしら雪

長寿の花　人丸

玉されのこしのたかねの初雪よ
玉りいひよる夕暮に衣かりあまね

名所百首 後柏 大和　大炊御門右大臣

花もみし人もこゝろのまゝにて
誰まちくらん秋の夕暮　知家

同 同百首六

玉さかの岩ほそれ大和の夕霧
もさこゝる風にも花の香そとまる　後光明峯寺摂政

同 吉野明日香の花の上の山嵐

春の雲めとく霞かけさと　家良
そのゝ雲間かりなくしそ

吉野 序中 柳の嵐　好忠

花にあかしこゝ春明の雲の花
しかくみゆり夜そもまかる

山の家を 三吉山の春駒　後光明峯寺摂政

浦人もていつか春ふかき
あみ山の人の書れしたま

鏡しれ 声の 流るよ人しらす

如意に花秋萩まし花あかなり
さふとふしめて萬代まさん

同万十一 あさはの 武蔵 人丸

くれな井乃あさはの野らに刈草の
つかのあひたも わすらされ

名寄四 秋百首 家長朝臣

くれな井乃あさはの野らにおく霜も
ゆふし深てそてぬらし時雨乃秋

新六三 あさはの 藤原信実朝臣

あさ井るあさは沢なる人へかれ
ゆきしくし絶え水のあきの那

新 万四 あさはのつ 山城又摂津 大伴宿祢千室

みしのまゝやわすらん秋つのゝり
ゆめなきりいものまとはなしよ

同 万十二 よみ人しらす

三吉野乃秋津乃小野に刈草の
おもひみたれてぬるよしそなき

建保三年名所百首 あさはの 陸奥 正三位家隆

あさはの野らもあらしよりくる人の
ひとねまちわひまさりむまて

後徳大寺左大臣

あさちふの野沢のますけのはかはかり
いとゆる露のみたれさへも

寂蓮実定名不出傳子　寂然法師

あさちふの秋風さよくむしのねささ
うたれぬや麻のなくらん

永仁三年八月歌合　兼実法印秋　藤原為経

むさし野の花いろさしあつめ
むしのね聞るそなきそる

天仁三年四月野州家歌合　仲実朝臣
あけやの採障

あけかたの楸まじれるあさぢふを
しらいもとれたるふしとなりけり

堀川院百首あけの日

月清きあけのゝ原は夕霧り
ほのめかくる夜さへねもね

遠聞十首歌合　澄縁朝臣

秋の野のあさぢの原は朝ごとに
鹿なりてすゝむ書かふる

名所百首　阿多野　大和　実清朝臣

秋かせはあたの大野乃萩原に
やとりもとめしよのけしきかな

夫木集　あたの大野　秋歌　従二位家隆

あたら世の野よりあさゐさくる人目哉
霧の風こそは秋すらしとも

建保三年内大臣家百首　家長朝臣
在大和国清輿

あさち原ふかむしのねもあはれ秋のよの
いくよすむとてつるなる花鳴か

貞応二年名所百首　秋　為家

草わくる衣にうつし化野萩
しのゝをはなもくさ色にてかけ

夫木集　月　寛元年百首　野月　後鳥羽院御製

嵐吹野原の化野なり
しらぬまてゝ見るもの夜の月

宝治二年百首　撫子　前大納言為氏

東野の露やの床のより枕
わしもなくらぬよもかさねて

後九条内大臣
東路のやゝ下りやました水
むすふ泉や秋をまつらん　人丸
しらして
東路のなかりのこゝる下けそ
ゝ色りことれハ月のあさき
文永八年毎月一首中同 山蔵 為家
山人のくる清の追ひ晩よ
ゆく道いそくかたへて山の井

家集　　月
おいてたもむ清かの野にいて花倉
いくく秋をあれぬさ御神に花みて
貞応二年八月名所百首歌　月
哀なり秋ハ淺識野のさゝ原
いかなるかしよ實にやとるらん
建保三年名所百首　従二位家隆
暮ぬとも清見かハるも跡ぬ底沢や
たとへハあけの月のかけかな

哀傷 新六二 さねかこ地へ 為家

山の錦あらし風さそふまそれ
野邊の秋萩ちらんとも

万葉 河内 又上野 よみ人しらす

かみつけのさゝくらはらあし
あまたにもまさもしもこそすれ

御集 後鳥羽院御製

ちるさよ松の葉ふくに治ひけて
夜なかくもしはし月かけ

同集 内侍に給はりける あさのゝあゐ草 猪并
又かくなん申しに

たくひあらぬ野への草葉をすそひく
年ふりまさのこゝみなりけれ

題しらす 万十六 さくらの歌 未勘

あめよまほ花くらの木ちやれ
刈りくもふるそへを

文應元年七社百首 小塩 山城 為家

千鶴見まほしは小塩の松の千歳より
一本のかくれ花咲にけり

玉葉集　　西行上人

はなちりぬく小野の芝生あらしは
心もとなき萩も咲かりける

同 中の河内　　鴨長明

ありそてやいむところかぬる玉の
言の葉も扉されたる露まなく

建長八年百首歌合人々よみ侍しの　前太政大臣

秋野には吹くの嵐音さへて
そのはしらくあらまきてふるなり

此哥判者光俊卿下に佐野
ハ細竹生ぐさのくさりに
三草とかさてりこ風志紀なりぬて
なるくゆくよみの一刀なさの花
よきてとはよまれさ拾て山
野之勝汲深淵得気象識字眼
所攬觸之云々

文治六年五社百首刈萱　皇太后宮大夫俊成

神風やうら枯野辺の刈かやを

かくまでそのことはすまむ世のかは
玉葉 題不知やうの 三河 為家
しらまされことやちれ野への鈴虫
にほくしはをなをとつゝらん
同 やしろの 清輔 好忠
家ことにくる風はけふれ萩の下露
本あらくよはれん花おしもちはふ
御集 清輔云
いともなくみをとらしつゝあき

おもしろくこそけはなつる嬉しさ
元永元年十月内大臣家歌合 藤原忠房
左勝 二人
玄城 野邊のしきあさつれ小萩露れく
ちらの色や色それなきされ
寛治二年百首 梅薫風新 従二位邦氏
咲よりうや白きもみすりやま
ことも野邊色の梅の下風
嘉元 新六二 元の山城 為家
ゆくのやゆきれてつきぬ草の

清見のまつもかすむ浪のあはに

建長五年毎日一首中 暁寺暁月

山おろし袖にさむし風わたる

よし川のよどの[illegible]のあけ[illegible]

建保四年百首 家隆

朝かすみさして山のはかすみて

つゆけき川のかはなみ明かの

嘉禄元年 三位の紀伊 續人しらす

こほる雨乃ふりしやみぬへき[illegible]

ゆふかけはよしの君もかなしきに

錦しつく万葉八[illegible]の 月

君かすむ霧のかゝりにあかつきに

明かもなけれは雪はふりつゝ

正治 月

三鴨野をこえてきこゆる[illegible]

山おろしのこゑさへ色の色

宝治元年 都[illegible]院宣[illegible] 八条入道太政大臣

見つゝいまさらに

[illegible]の山城[illegible]

志かのねのきこゆるまゝにしら露萩
おもれれけり乱れ乱れもよけり（風のまにまに）
源親継卿

さをしかのつまよふ声かりしめしのゝ
志のゝをすゝきにつゆかゝるけり

家集　志めしのたわみをは　鴨長明
秋の夜ハ独志めのゝ袖ぬれ乃に
袖に月乃やとりなりけれ

野径月　[illegible]集三首入　法性寺入道関白
尾へむくる志かのをのへのよ
やとるとも行しくにはなる月かな
題しら寄草　志きのよる民部
君のみ恋しき人志ものこそあれ
思ひしれ名にこそ立そちの
秋萩秋しのきの露かなしき

永安元年十五夜東山歌合
ひとすぢの　清輔卿
むしのねも
あはれなりつかさのちも
露もまたき野の千草のあきさちに
みちのくに
たれかは萩のよそに見るへき

新撰六帖　ひきの麻　後久我太政大臣

ときの御衣にたへあつきゆへん
川邊の秋の夜の月のそら
續千載十五 雑 万葉七 作者の讀人しらす
もゝのゝれもさほ杉しきの小舟よ
慶しらすかしき出しく場を
讀人しらす 万二 作者の人丸 柿本
あ雨さつこゝろのあらかなよきを
慈つあまいいゆくまで
續後集十五 雑 芥川の歳
後京極院摂政良經

芥川乃難人の古道あめしかなりや
なのまにとふきあめれちり
讀人しらす 万十 よみ人のかり
信来のはなのとそのまくゆへのくてむとをいて 和泉式部
我宿いもうの京都妻人と歳よなり
いつはりしらぬ人の枝なるらん
此哥もろこしにはれてはもちる野よ
おもへもろこし雨りてこまる野よ
萩すゝきも萩の花せの絵
もとまれこれもかれたれいあるとこ

永久二年太神宮にて歌合　すゝむしの

打なひくおりてと見れは鈴虫も
ことしの声はそのまさりけり

寛暁　よきの御　中納言家持

すゝむしの声よ方をうるさくなかねはにほ
鳴よしもなつかしきりつまれ

千首和歌の中よるの歌の括法橋顕昭

ときはをよするなきやさいらん
はちかれ心をよりきてすかしく

新しく波歌合の歌　よみ人しらす

まつむしも人をまてはや秋のめ
かりしはかくしてうら歌かりける

家集　ゆきの御　後叔卿下

こゑすゝなくすゝ乃よ宿のくらさ
あさかすすらんいさ紹てみん

賀茂社百首歌　ときの　慈鎮和尚

萩の葉の萩乃もとれよするひく色な
秋成りうへのまつ風

家集　　前中納言定家

松風にちるはなとゝまきえあきて
旅行人のたもとゝもなし

永久元年十二月前斎宮之通歌合　祐子内親王家紀伊
或万代作斎院中務のあるの　従濃

年をへてまつれあらし野にかりやま
たかくもやまさし萩の花もとを

家集夏十首中　家隆

こゑ月のよるはあらしの郭に
さをしか萩さきすゝ人かへりなけ

喜多院入道二品親王家五十首
住吉の社の歌合　野宮左大臣

夕されはふかしおとにみはらるゝまてはれまの
こさし野の萩をあらぬ白波

原

弘長元年百首歌よみ侍ける　後九条内大臣

秋風のしのゝめもむすほれぬ萩か原や
人まつむしにも夜毎もすめりん

建長五年毎日一首中　為家

日をへつゝ秋風さむくなきちるの

なかめつる草原いろかはりけり

喜多院入道二品親王家五十首歌に　源師光

うつゝにも床もあらそふるなかりけり

をかのへのかるゝ草原よもすからふく

家集秋の月をよみ侍りける　西行法師（上人）

秋の夜の月のひかりの影更て

すそのゝはらにをしか鳴なり

建保四年内裏歌合に　正二位行能

露しろくよかり風の宿を見ん原をハ

あさかりすてし庵をしめる

千五百番歌合にあさちふのを　参議雅経

行秋乃別ましのゝ紀をす

ゆゑてをはふくさあさちふの原

題しらす万代よにしらつゝ　女御徽子女王

我なれて見しうかりける人もなき

浅茅か原をなかめてそ見る

家集冬の一字をよみける（十五首）　定家

いつのまにかはらんと山わけてしに秋られて

あらしつりたるてふ比月のけ
新集 あつま みちのへのうた 六条院宣旨
あつまいなのへ乃原に風たてて
宿ねよ出つる月のゆなかなか
新古 三の人いろさめのうた 俊成 判詞 未詳 摂政家 歌
梓弓春の日くらし引つまく
八さのいろよ海鳥なきすまれ
七行方十三 いろし あさよ見人しれ
けまくもあやなかし よし

山の人乃いろし比原なりうら
ありし おは こや清く
新集 いく人のうた 未詳 鴨長明
よこ山比いく人の原比よもこそふよ
秋風さむき部一忌しも
比新いは世下きれよのうら
ちるを昆ていしへのたろ とぞ云示
そてともをつかりける風のい
くふけいはるまり柿りて

よもこその中はよるふして

百首歌の中に寄山思ひのうた　隆信朝臣

著竊れたえぬ思ひの山を鵜りも

ふもとの原りしこそすなかるか

永保元年大嘗会悠紀屏風　ちとの松原　宸又手石　前中納言匡房

唐鎧ちるちれ松原いふちをまれ

未来てるさうけれあれとしまれ

宝安大嘗会　為仲

もくらよをいのるいのりかひあて

ちくの松原草生しきれ

三百首之中にをみなへしを　宸　好忠

あさちあふる小野の志の原

かせのふきりと引きるなへき

秋三百首中にをみなへしのうた　後京極院摂政

ゆく人も袖やぬるらん霧あさふれ

なましみれ草れ秋のしのはら

家集　源順

時しもあれなよしの原を秋りは

あつまちをさしてそけふはむさしのへ
日たかくのゝら　むさし　好忠
むさしの野の原の萩を見えし記
たかはかりもの咲くらん歳よりもしこ
弘長元年百首歌を　むさしの　従二位行能
見渡せはお花かすゑに白波や
たちうきたちもらに秋風そふく
益首云哥を和しける中に　万代　恵慶法師
あつまちの小春やこねらんあつまち

思田の原なり若菜もつむ
三百六十首中　この野河内　好忠
雉子なくさ野の原をとほれは
木葉の花をいとゝ色まするもり
宝治実竟宴名所御集に
後久我太政大臣
霞かゝる菅のさかりさこえりする
このへんのかたの野もとしは
取あそ年法橋　このへ　名所歌　北の原　高雅法師
むかし小野のこうらの原の雲は家

さめくる海もなほしのよするる
此哥判者清輔朝臣云右
催馬楽のことしをこそてるま
ひとれとさするなりと
云く

西行上人
かれ野なるゝ霜に心をまかせれは
かくらのりとに雉子鳴なり
六帖題之新歌　正三位知家卿

花にこふ人ありしやむかしはあれと
かの野の宿りにさかれるを
延慶元百首よし宗　参議為相
我ひとり山のおくや野のりしき宿
ゆきつもりける比の花
文永元年七社百首よし宗　為家
すゑ山里のとまる花すゝき
袖のほそく雉まゆくらん
宝治二年百首よし　後嵯峨院御製

昔葉てしそのの原は宮さとより
それとも見え匂色乃梅のえ
心敬法師

同
袖ぬれしくつくもあらん思ひ若菜摘
そのの原の雪の下草
建保三年内裏名所百首名所恋
従二位家隆
よさこの原とも
行ゑをよそにその原のよそにみて
猶ありあふさきり人をちかまん
宝治二年百首 寄原恋
信実朝臣

あふまてはよそにその原よその人 みゐ
妹かありとはかりはきゝわたりなん
永久四年百首 そのゝ原 信濃
六条院大進
道遠ミ日も夕暮に成ぬれは
その原まてと結てゆけ
家卿合
家二百合
為忠朝臣
もとつてはまた霜をきえかるそのの
その原ふかくあさの葉そゆる
寿永百首 そのゝ原 相模山城
讀人しらす

なからにて山しろれつきれなるを
ちるやちるれうらのかけれ面影の
あさよのちるをちらせけり
従二位家隆
梅の里に流くさの原れ夕霞
棚もらんしても宿ハあるかれし
千首當座之人
法橋顕昭
むさしのゝ草れゆかしみえね
流くよの原の雲れ夕鶯

家集 しめの原 山城
恵慶法師
さくらの木あけき梅のさかりハ
妹かの袖ふりうつりそきる
題しらす 懐中
よみ人しらす
梅遠さよありともちるらん梅の原
宿と鶯乃ひとりなくらん
日 懐中 みゆかり山城
日
知流りよきれのしりと見草
名をみ原よ曲つるこのそえ

建長七年顕朝卿家三十首歌合　源仲業
うきしまの原
相坂の関をいそきて人こゝろ
うきしまの原になしゆへなん

建保三年名所百首　うきしまの原
摂河　従三位行能
雲の浪尾花かすゑのなそてもなし
あはれこれうきしまかはらうき鴻のかよふ

貞永元年　百首嘆息
民部卿為家
うきしまか原うちなひきまきくらし
なかれはわたるゝつゆのうけし

弘長三年　当座東撰六
安嘉門院四条
旅人の道ゆくさきもひとりかや
さいつりしはのうきしまかはら

浮島原にて
他阿上人
けふこそみしふしのたかねは雲よりて
はれゆくけはうきしまかはら

元亨年中　当座
葉清卿下
東路や道のはるかに花風もそ
袖うち流ぬけうきしまかはら

永久四年六月鳥羽殿北面歌合 雲居寺の かへり 攝政
よる雪は井手のわたり京へかれて
うふもりくさかやうらん
元久元年春日社歌合井手のさとにて 攝関
法性寺入道関白
あやしくも時雨にくもる紅葉哉
井手のさとつゆしてゆけども
時雨判者後京極殿 井手の
さつるにあるあさりは
紅葉をめくり
但時雨まくれ

といふことねれをやきさゆへる
らん ととこ
宗大僧正のよやのへ松 藤仲
千代ふへき子日の小まつひきて
京極 いはふ野のしみず
攝政中明とゆつかりて 後川 紫金台寺入道二品親王
浪まてる人ねかりとり駒とめて
ゆふつかりつけあふまえさん
新集 おもかのいへ 長歌 鴨長明

花すゝきかれのゝはちらぬきれは
秋かせふきつゝりあくてそり
此哥伊勢の下をとるなり大神宮の
原すゝきなりも書よ稿あり
かれの人もしられねとも
云ゝ

日くらし　真利　月
梅ある里乃人りかくらんくもりや
あまりの書乃営めかんらん

後子内親王ふ奉りて山田の原　伊勢かたし　順
神乃ますゝ山田の原乃鶴のこゑは
ゝゝゝ千世いつもくへゆかん

家集　鴨長明
竹川やゆるれをとりまつはなるゝと
山田のもちのれ書は雲ゆ
此哥も伊勢の下をとるなりゆ

秋田哥　家集
前さき稲葉の雲もおりおふさき山田のちらは時雨てうり　後光明峯寺摂政
此いふ所ありてよめれとこ云ゝ
正三位重氏

あけてくるかりは越の花ともときさ
まよふてそれにそ出る白雲
新千載三 よみ人しらす 寂蓮法師
みちのくのまつらや原をかれは
待かねてうらみしはふこゑの哉
秋の歌 家集 後光明峯寺摂政
いなつまも稲葉にかよふ打はらひ
山田のさとは時雨てそけり
永享百首の歌 後鳥羽院

雁をいつみまちくや原こえまて
宮に袖をかけしつれ
家集 樹陰風木 月
日かけりはあらひてゆくむつけるし
まちて萩原立そわる柳
新千載百八 よみ人しらす 萩原
大みかの原にかる雷は
いさこるかりそあしかなよ
建長八年百首の歌合 右大臣家

立よりてかくへき宿もなきわさ
まつかねのあしたの原に雪ふかりつゝ
此哥判者顕昭云滴つらゝの
原家もあるなれと信実卿の
のこゝろをり雪中の旅情
識をこゝろ四とこそ

人丸

ふるさりれあしたの原はいつよりか久々の
三津にしをりしてよく恋立

毎まちひ 云々

後法性寺入道関白家百首
万代 藤原良清
あしたの風もへさえ鶴見えねは
まつかねのあしたの原に雪ふりつ
寄草恋 万七 二一のまつゝよみ人しらす
まきまつて山しろのあしたの原かつまきつよ
人かんりまくたしおあしたの原

六帖 新六
衣笠内大臣
恋しひぬありしいつりれひまもされ

あし乃まろやゝゝ人めかりけく

家集 恋二十首中　家隆

知はりなあしのまろやのなしかせて
りりなをあかぬ契りそすれとは

中務卿親王二十首会 恋　権僧正公朝

何ゆへ人めすまくかけしん
忘めゆいましとあしのまろや原

康元々年二月秋子内親王家二十首 恋の松原　駿河　若狭

いかにせんあふをみなかりの小かるまく
哉りきはける恋の松原

後朱雀院　甲斐

かのそれも松あふてふ筏のことの
恋ひまつ原哉りそめもん

同家歌下三川国名所二十首 名所(？)　清輔朝臣

りまのなるよゆる小松かり
かりかの年のあしかれかり

同　藤原通経

神りもまやそめもん小松かり

いく世へぬらし紀人のうゑき

元暦大嘗会 不しろを　大蔵卿隆

みとりなる松に二葉を経て
小松かちよもわか葉を摘

後葉 こやの松原　摂康
法性寺入道関白

夕しほはまのみえ月くもれは
ともなりそわたるこやの松原

建保三年名所百首 わくらの原　陸奥
僧正行意

わかれすするあさつら原の三まよふ

のこるまつかり嵐ふくなり

同　藤原康光

嵐吹まつの下宿やもしをらん
あさちか原は霜こほりけり

最勝四天王院名所障子　具親朝臣

浅ちそねまつ吹風もみよしのの
なれにしあさちか原の山風

百首哥　八条院高倉

露の宿のあさちか原になく雉子

人めのしけさよりもくれゆくのはや

建保三年名所の百首おなし　松原 摂津　正二位大納言

うら風のあらき松原吹まよひ

おしよせわたる住の江の浪

同　知家

さよ更てあらし松原住吉の

うらふく風にちとりなくなる

同社歌合萩をあきつの原　未勘　源親房

ちるまてとあきつの原にさく萩の

花とちりあふかつのしきれ

永久四年百首歌あきやまの原　同　仲実朝臣

青山のちらは霧の中にみえしつゝ

西和見　さしくらかりあきやまの原

いろあけちのそやつゝし　結挙

いろあゆちの原をゆ錦は

恋の山とへるもつしのよ

天延三年関白家歌合あすの原　大和　よ人しれ

霧のそらつ鶴の原をはなふくれたえ

いまそつゐしるく野ハなすりそなり

宝治二年百首　後九条内大臣

鶯の声ゆ野へ入りつるかれ

いまゆつむしつく跡ハなすりまゆり

嘉元三年四月為相百首　忠範　民部卿為家

はらふ又たのなをもれぬる思ふ乃

鶯の聲の花の志らく雪

康和二年七月堀河院家人　令詠　源兼昌

別ある鶯の聲のちらすれかなかれ水

ゆくさきねむらうは絶乃砌

永久四年百首　同

あさちふの露よりうつるやまのはん

鶯の聲もちるらん清き唱なり

源民平卿

つ鹿るされ鶯の聲あをつら

くるしさをとしらさりぬる

千首為今あるの素　陸奥文橋石清三位季能　文治

ありまのこうら見ても松のゆんとや

末よありてふあふ乃松たえぬ

聖時ると明玉あそのゝ原よら　従二位行家

時るもこさるけとやかくこなれ

あまたあれ原より身ふうら花

宝治二年百首　あさくハ原　大和　前大納言為氏

代々ふりしあさぢよちよとすむの

あさくハ原の里の里の

吹田経家にて後　大納言経信

山乃もとにすくあしいろハわすらく

妹よし悲まつや時わすれなく

建長八年百首歌合　ゆきさの原　右近中将具氏

時乃ましいそのかくれ雲まするらん

ゆふさ乃原れ草の夢まは

新集家歌合三首中　なるさ山の原　大和　前中納言定房

露たこうされ原れ知ありけ

仁安二年八月経盛家歌合　紀重保　資隆朝臣

夏河時雨ふりかし里代々こそこれハ

かくさはれそらいかなしよをもり
新六二
よるへ人へきつまそ
君かこさる三笠乃原かりかね宮れ
あめへていかゝ立もちる飛
同抄　杜三の本　蘭恵にあけのほう　未勘
神祇伯顕仲
うつ山しみあけ乃原のれ萩はら面
誰かりもつ遣ひもちよつるん
題しらす　頼政之三みの原　山城
よる人へきつ宿
この原ふかゝみ里の都わるも

やゑ面と川ら渡のこりもゐる
三吉原　雑哀三　ゆきの時冷泉三百首　蓮今村
この花原旅れ尾花かすよ玉ぬみ
道のりあひありあす宮のよ
うちかえてつゝとをむ
建保二年内裏詩歌合野外秋露　みよしの〻原　大和
大納言忠信
かゝるまゝやまかれ吉つ雲詠むく
家わ乃かすみてるみよしのゝ
建久二年六月無題　家毛
定家

いく夜かは山も霞て年ふらん
まつ立見えてよしのゝさと

前摂政家百首歌合に海辺の月を　家隆　同

ゆふ日さすいなの篠原の郷に
けてのあらしをはらふ浦風

新葉　宗良　同

かきしくれいなの檜原ふきまよふ
人の時雨は秋ならすとも

新千載　よみ人しらす

こゝ思はれし頃のいろ/\に淵は
花ちるとや雲もなくらん

文應元年七社百首　為家

九重やこゝのまつ原茂る朝霧

正治二年百首　みやこの原　喜多院入道二品親王

心あるをこそ見はやと思ひけれ
霜かれの麻衣に京来の原

三百六十首中　さゝら原　嵐　好忠

あたご山しきみが原に雪つもり
花つむ人の跡だにもなき

堀河院御時の百首　源仲実

時雨つゝ日数はふれどあたご山
樒が原の色はかはらじ

名所百首中　院家云　為家

かよひける人の跡かはたえぬらん
樒が原もつもりけりわかるゝしらゆき

山家集　思ひの原　陸奥　後一条入道関白

あこがれて家やこふらん陸奥の
思ふの原より秋風ぞふく

題しらず　西行

人はいさ我をも思ひかねつゝや
思ひの原をしめしゆふ暮

家集恋百首中　恋の歌に　又如是　藤原義孝

桐原や猿り人のしるしとて
一村も宿りこそぬれゝは

夫木集　野的　源仲正

しのはらやはのくもちさきそねて
旅行人ハ我しれぬそめてや
建仁二年老若五十首哥合　後京極摂政
暮ぬれハ野ちの旅人あるそ
宿れともやとるしのはら
寛元新六二　しつかけ　信実朝臣
宿しほくなすふ山のしのはらや
しのはらのなかるゝ色あるそ木のまよ
同　新六二　しのはらの原　下野文下総　衣笠内大臣

草かくしそのしの原ハ露なれて
身ハあさましの野をとつまし
建長八年百首哥合　光俊朝臣
下野やしのはらの原の草こもり
行しらはゆるもゆる色かな
永久四年百首　さゝわらの原　前兵衛房
名にもたかき虎やふしのはら東路よ
みちといふなるもろしの原
題しらす　懐中　よみ人しらす

しるかなる中にこそうつれ霞なりけり
こゝろくれてしほりのゆくへの原

家集　よしへのはら　　鴨長明

かるかるるとしへの原をつれまし
わすれずやあらん花の都に

家集河辺鶯せきの原を　末句　源仲正

啼つゝすむ鶯の音ばかりそきこえて
行尾もとまらぬ野原の邦

林

祇園社百首　林鶯　　皇太后宮大夫俊成

風はたる志けき林の春の雪
ゆくへしらぬある林やのこせる

光明峯寺入道摂政家百首　林鶯　　従二位家隆　家隆卜仕本

誰かまた木葉のかくれ鳴捨て
雪の林をわけてなくらん

同百首

月

打なびく世は春かもや天の原
里の林も花と見ゆらん

永仁元年九月亀山殿十首　林頭秋望
権中納言公雄
秋くれてよものの杜ハ色みえて
ときそ葉乃まれなりけれ

日よし紀の林　山城　寛尊
清けれはよるもさむき林の色みえて
うつ川ふかきこり秋風そ吹

日よし山寄　大蔵卿重経
雨さえちれるさ山林くれて日かり
しくれハ為殊のまゝ秋風そふく

建長七年顕朝卿家千首　きぬ山寄　為家
秋すりあさてぬるきぬ山林もみちしつハ
いつそのへてあさねねかん

源仲正
清けれ咲ちしほれるれ清き林
きみハもみちりなよろしけれ

きの林寄　法橋顕昭
かけつるなかうつ乃あもにあつむる
一たちの葉もおもやちりまさや

此哥ハ雲林院にて俊恵法師
歌苑抄えらひ侍りける時序に
しくらなとやつらぬきして
よみけるとなん

ゆし　　俊恵法師
ちりぬへき雲の林の木の葉も
そよすさの風をまつとしるらん

百首の歌の中に　　定家
くもゆ行のなつなかはされぬる身も

袖よりやなるゝ秋の袖の色
建久二年左大将家歌合一字題雲　二年そ有
瑠璃の水錦の林いろくよ
心うかくる秋の山かせ

林字容瑠璃　きし　　土御門院御製
くれなゐの雲の林はしら露やまかふらん
雲の林かたまきのたえ間花

新葉集のうちに　雲林院　　和泉式部
身のほとや哀れたゝすへくかゝる

雲のはやしのりの一むら　民部卿為家

池にさく花林下にて見れは
かつさかりなるすあをにかゝる

森

続　志らぬ万きいはたのもり

山しなのいはたの杜に心そめ
手向しつれは妹にあひにき　人丸

式部卿宇合

山志なのいはたの杜にぬさおかは
けたし我妹にたゝにあはむかも

同　万

よみ人しらす

山しろの岩田乃杜に心おそく
ねきことむけて歌よしあふ

同　宗尊

さら山

月

山しろの岩田乃杜のいはすとも
いはまなる秋のは色にいてよくるか

増基法師

いさしるれ杜のしたてゝいはせや
いくさか杜をむすひきぬらし

内裏名所百首 いはせのもり 未勘 従二位家隆

いはせの杜の下水ゆふけく
大宮人のもしちるころの秋

建保二年名所百首
いはせのもり 大和 同

秋かせのいはせの杜のいつしらく
わか恋まのくるゝるの黄もこし

宗尊 蝉を 同

河こていはせの杜にことし蝉の
声もしけすや鳴わたるらん

夫木集 雑 時鳥 いかりのもり 未勘 源理光長季

郭公あかつきあかすよそにて
いかりのもりにいく世経ぬらん

杜規 春云 正三位知家

ちるなよいかりの杜の春なからん
あまたね蘇れもこそいへん桜えぬ

記しるを懐中にそのあたりよめん人〳〵しらし

あきゝぬといつその杜はいそのかみ　清輔又拾遺

あひもはゆる人もあらなん

家集　いくたのもり　拾遺　　和泉式部

なほふるあめの生田の杜よ雨ふれは

むかしおもふと人はいひきかせ

最勝四天王院名所障子　　雅経

秋のくれ生田のおくの松風よ　秋

麻の葉なひきて杜の下露

同　　後久我太政大臣

秋のをのふ生田の杜の下紅葉

霜のかも時雨も浪の末まてり

建長八年百首歌合　　従二位行家

吹きよらふ生田の杜の下風に

川霧晴て月やすむらん

ちりしきてよしやいふよ　　林周法師

難波なる生田の杜のいくたひか

神とうけつ　我はちらさむ

布川のたき見にまかりて　一万代

後久我太政大臣

立かへり生田の杜のいくかへり
見れともあかぬ布引の瀧

家集　いつきのまつり　未詳　鴨長明

云のなみよりてもなかめにあひある
いつよれ森乃木のれしと葉よ

続しられ　六二　そなたのまつ
よるへ人しら波

妹か家れいそ入乃杜乃夜の花
こころむすほりもくつらいみえぬ

家集　みつしのまつり日　後鳥羽院

鴬ハ春まちつけていはしみの
杜の玉枝ふりあかなくも之

六帖　新六二　きてそのまつ　衣笠内大臣

いさ川夕ゐるきて山しろの
たくその杜のり宿やりまし

寛喜元年女御入内屏風　家隆

白妙乃夕なきすまし岩河
たくその杜乃竹のした

同　　　　山家法師

いさ河川なみすゝしく暮るれ
たそそのをり乃夜の夕暮

同　　　　後久我太政大臣

涼しさよ秋うおもへるいさ川
たちそれをちり乃落れ下木

雑上の中　こゝろしのをら山嵯峨　　権僧正公朝

ちらねとゆかくの妻よ花咲て
老木となるもさりかしのとち

千五百番歌合　　　　家侍従

かくておほ堰のみねよりは(?)て
くれ人やたつねしのをり

小倉山同内裏九首　嵐山の秋　きそのをら山嵯峨　　家隆

ちり敷を都によそけ時雨る
とよたちれをちの松かよりおちき

建保三年冬京百首歌　　　順徳院御製

秋もなほ流るゝいはし堰来れ
やとよもの松に嵐そ吹なり

中務卿親王鎌倉

こゝろよりかゝりける身を山しろの
ときはの松も羨するかな

民部卿為家

千五百番

松かしはともかくへこそ花はちりぬれと
春やときはの松乃ちとせを

従二位教氏

松かえをさとのたえぬの松の夕時雨
いろくらしる秋の紅葉く

千首歌合　ときはのみとり　題

醍醐入道太政大臣

錦しく春はさかりなりけりぬれは
と一かのときはたちのみとり

紅葉和歌を云二ときはのみとり　題

小大君

うら山の紅葉乃色をやるものを
そくうの松は世かはりつゝなを

永保三年大嘗会主基方御屏風　ときはのみとり　題

前中納言匡房

二葉なる若松乃枝年を経て
神さひんまて君はまもらむ

千五百番歌合に　春のうた　野宮左大臣

三吉野乃よしのゝさかり丸梅のむかしの柳薬にかまたへきり

永久四年百首　藤原忠房

若菜摘年ハつもれと春日野の松ハふりぬや春を知らん

西園寺入道太政大臣家にて百首歌よみ侍けるに　藤原隆仲

久かたの空もけさこそとしたつらんの春のはるかにかすむなり

建保二年百首歌たてまつりける時　藻壁門院小宰相

いさ居の杜の木末をとゝむらん

つれにこし川ゆ月そさやけさ

中務卿親王家歌合に人々よみ侍けるに春のうた　雲朝

春かくゆきそもそふもしらぬの

荻はうれしき木のもとり

前親王家二首のうた　為氏

志らんのゆきむすゝきのかつえ丸杖

花かり人をなつかしく川もしらぬよもすから

新しく六二くろしのうち

未勘 読人しらす

かさゝきの松のこすゑにおりねとも

えんひはやさしてまつりつね

夫木中 夫木 風のうち 保安式四

未勘 鷹司院按察

うらみしな風の松するちゝの花

ちゝらあさゆふる色なはちくとも

後京極院入道二条御中宮 未勘

吉田の松 未勘 野宮左大臣

行末も吉田の松の葉分をれ

君もてねくらよのひかりそまつ

建長八年百首歌合

藤原伊長卿

あさましあまたよしゝまの松のうれ

ちりそふかいとゝ色なる松かえは

新六 依田社にてよみ侍る歌 おさなのうち 有律 定家

君か代はよゝを松の言の葉とは

春と秋ともやちとせさらさん

新六 立田のうち 太和又山城 源信明朝臣

山姫のちとせのみとりさかりて

立田の山りは紳さへ

建仁元年十首御会　後京極摂政

朝みとり松千歳の色川里山
春のしつくや千代かさぬらん

寛元二年百首よみけるのとり　経家

はるよわけてあれその松の郷に
なみ立かけてもゆるかすかね

百首御会のとり　順徳院御製

内裏さへ松か枝の河波をかけて
ちよしもそれとよりみ白雲のみね

松時乃人々よませのとり歌　藤原敦経卿

萬代ありあふなる園の松の末葉より
雲井まてつたふ鶴のこゑかな

家集万代　隆祐朝臣

久かたの雨のまつの時雨てや
空のうへてのかすよふるらん

光峯院入道京摂政家百首　松卯 卯花 月よりのとり　法印定範

神代より光やかけし卯の花は
けい色天てらす月よくれとり

家集 詠りのなかに 未勘 俊成

かくしおけるねかりの枕の下ふかき
めくみし草はうつりぬる
此哥はあるひとよみける歌を隆源
法師ねかひ侍りけれはさる
ことをとてよみ侍りしと

文應元年七社百首歌よみ侍りける 未勘 為家

ありし河瀬もしらすなかれ来て
ところ乃末淀にゆるさらん

永万年中七月經盛卿家會人詠哥 かくしのまくら未勘 藤原資隆卿

こゝろ月のさしいれしまくらの郭公
我のおもひやそれまてとやまとらん

千五百番哥合 正三位季能

こゝろ月のもるしの枕にかたらひて
御襟もゆるさぬ秋の夜風

建保六年ゆめのかたりにゆめの枕 未勘 信実朝臣

まくらにはあけぬの枕にまとろみて

家集 ありし頃の枕の とききていつはりならん 為教卿

夢しれや人のつらさかすならん

命こそあらまし物を杜乃なをとせし
あまりつらき君か宿をも見まくほしや

新古今 恋五 うゐてのより 山藏 よみ人しらす
かくしてやなをやまもらむおほあらきの
浮田の杜のしめならなくに

夫木集 俊頼朝臣
かのみゆるうき田の杜の椎柴の
なしつらてさしむかひても人をおもはする哉

御集百首 名もしらぬうき田のもりの椎柴の名にて人を思ひやるらん 衣笠内大臣

後京極摂政 内大臣 浮田杜述懐 家隆
名をのみそうき田の杜はいひなから
身のうき埋木のはてや果なん

新古 百首うたてそのより 為家
涌とりすむかうそて浮田の杜のうきなをも
まさねてりうまつけさむしなきも

文治六年 女杜百首 皇太后宮大夫俊成
まとりすむ杜の梢をこひてけ
さへもうへかりふかし人とも

正治二年百首 前大納言隆房

秋乃よもすからそての杜を紛りも
あらしと共にちらりなくかり

家集　知家

夏衣かりてそての杜の村雨り
下葉のうつろねまよのゆふかな

同年の杜　後嵯峨院御

いつよきんうきの杜よこつとこそも
尋ぬるもそのねすゝねありを

寛元元年女御入内屏風杜名
岸流水大あらきのもり

西園寺入道太政大臣

秋かよく風よ夏かさき大あらきの
杜くるまのけを凉しさ

家集　雅経

野辺乃多くも露りよりる大あらきの
木末よ漏るく杜やんとト草よ

建長四年百首歌合のもり　夫木
右近中将

身をむらつり浪よそめて下葉
色むれ杜は色つなよまかわ

家集

前民部卿雅

かつら山立のくもはれて見えて
花さそふ枝かりにまよふ春ゆき
道因法師
永万二年
とゝ山すかせてやまかへるかゝされ
花さそのありさき先さくらん
俊頼朝臣
花下忘帰といふことを
東路の花さそふ嵐の花なりとも
かたらんことを忘れしやは
光俊朝臣

紅葉ちれ秋のあらしのゆふすさき
又あめふりかゝる山のもなし
時雨いむさし野をとゝめかへり
いまこそ山のもみちしてよく
秋の社のもみちに林ちらかしたる
るよ紅葉しては見えてちるなり
あるともなし
弘長元年七月
家人しけ
山しけくもちれ枝の葉おほし
きりのちりともへかへら

ちりゆくとも夜よななきりけり

康治二年百首枯葉冬のうたに　正三位知家

むら雨にかれ色もゆきてれくるのり
いくたびか秋の木末かもしらん

家集秋のくれのこゝろを（冬枯のこゝろ）　六条院宣旨

はとうは秋くれてみれ枯ぬらめ
梢乃紅葉ちりしそめよ

拝亭航代百首落葉のこゝろを　後京極内大臣

紅葉ちるやまをれの杜の木のもとに
萩の葉にそよぐ秋風かよひく

家集落葉のこゝろを　左京大夫顕輔

まつ木よの梅ちりまさこの杜の柞や
あらしかはなれゆくめともせとて

観心院二十首のうちより　大隅

見えん人あつまりて
我こゝろはかなき仏をたのむすゝの
さしよめ杜の下もしるきされ

千五百番歌合　醍醐入道太政大臣

くろふかりは秋のよの[illegible]

尾上にてきけむ山下風のつらさ

永久元年内裏歌合　堀河院御製

鳴よはる虫の枕によそふ涙の

上毛もつらく雪はふりつゝ

詠立秋御歌　後京極摂政

下葉より露をさそひて秋のくる

ゆふしまの枕にひともしらすく

新葉集時雨三の中　後鳥羽卿

なけりしゆふかれよの枕の郭公

月のてらしける浦つたひして

康平四年　前枕前秋大宮歌合　小侍従

号旅枕　後京極院　三丈

紫の雲よりきまてありつるは

木のもとさ夜の枕よりきる

文治新六二　信実朝臣

深草はぬのまくりきの旅枕

まくとけてこそ花咲にけれ

宝治二年　枕和歌集　あの旅枕　納言　光俊朝臣

時雨の雨ふるく さつれいなみ枕ふ

木葉ちれ杜も色かはり行く

屏風絵に杜こて井の杜よみてける人かりこて井のもり 山城又侍従三文書院

寛玄法師

人乃おやのおもふ心はいかならん
むしこ井のもりれ秋の夕くれ

恵慶法師

結ひえてくるひも見しらぬかたまちて
あくま井のもりかはらてふりすく

題しらす 万代衣手のもり 山城

馬内侍

春は花秋は紅葉とちりぬれて
人も立よる衣手のもり

建長六年百首歌たてまつりける杜

光俊朝臣

木の下に落る紅葉ちりこそれ杜
はしのほかりや時雨しつらん

名所百首歌中恋のもり 紀伊又山城

弥蔵女

かなしさの我身ひとつにしけれは
恋のもりとも如やみらん

古歌と

よみ人しらす

うきをまてこぬ人は猶恋のもり

あはれあ霜ふのまくらにねさよ

新しれとさらしのきりすゝ文蔵 月

人もまねるひきかれ玉にてう

ゝ残まつしの枯はありけれ

同 六二

名ふと我うもいはしたる乃 月

もりしとなしようけ成給

夕集従 あさまのゝり 未詳 中務卿親王 続念

いゝみさんかしれさ無小あふち咲

あさまの枯乃あさましのゝや

六家集 御前あさつのきりよ 月

人うらさ栗津のきりこ升る鷺の

つんのそよろとそひなさし

同部 と新 六二 知家

夕つゝひ實さりも栗津野の

枯れ本来り月そいさよ

康平八年 三月 親王家 三人 あさやきのきりよ 文 冊 後 小侍従

ましくさく花田れいもはらけて

玉ぬきかくる青柳のいと

家集 山城 あめふりしを

ありとてもそふ人もすててつる里に 和泉式部

いかなれよりくる春そおしき

新千 懐中 よみ人しらす

末ゐりと絶あみれむ公とあるゐと

面のとかまりそひとつね

同 懐中 ありそのもり 尾張 屏風 同

流るるゆくあかりまてそひしつ

ありそのもりにくもりゆくるこの所

文応元年七社百首 小野のもり 山城 民部卿為家

松かねまつの紫も一本まて

小野のもりは色そまさりけり

同 同

来ともと小野のもりのしつくそれ

神のちかひを報へてそまく

新千六二 ゆふきのもりを よみ人しらす

高鳴やゆふまれゆりの鳴るすみも

独ねをしとあらふかなかな

名所百首　花園左大臣家小大進

春ゆくゆくゆふつけのもりの下草の
茂みつゝもしやあとを遅るの錦

法性寺入道関白家右京大夫

永万二年中宮亮重家朝臣家歌合 時鳥
夢のもり　未詳

待よひてましに給ひかとも小郭公
夢のもりまてしこう鳴なる

旧院摂政家百首祝　三笠のもり　大和　又筑前　俊成女

君かため神かきまもる万代を
三笠のもりの春風はふく

宝治二年百首　弁内侍

時雨れ雨降しもかれもや春日なる
三笠のもりハ紅葉しぬらん

同集　いはたのもり　未詳　光俊朝臣

着露るはいはりの杜はゆふしてや
いとゝ綾かけてかゝるしら雪

古帖題枕第六二　長瀬のもり　山城　為家

よし川のもりのひまよりうつるなかれなる

よゝにのこしてたちさかゆるれ

家集　まやこのもり　祐挙

色ゆかしみわ山人をまつまて
都の杉かんなをなまされかし

此哥ハよつまへ下まるり三輪
の山ゟやこのもりなきと云所を
云所ありてよめるとそ

六二秋　篠田　又信田　和泉

よミ人しらす

いつミなる信田のもりのくすの木の
千枝にわかれて物をこそ思へ

洞院摂政家百首　隆祐朝臣

晴くもりいく度かはりて時雨して
信田のもりを浅くそむらん

百首　従二位家隆

降れとも信田のもりも秋されて
家ゐよりあへを多くかつらん

建保三年名所百首　従三位範宗

うつきまれ関の戸やもさまるらん

信田のもりの千枝の下草よ

千五百番 夏 ならのもり 清輔朝臣

涼しさをなつれる風よふきそへて
思ふ乃もりは秋やきぬらん

宝治二年百首 正三位経朝

名のみして秋にも思ふのもりの紅葉の
いかなる時雨て色かはるらん

御集 しつのもり 夫木 衣笠内大臣

夕立のすゝくのもりの下草は
枯もりけなる名やたつらん

題しらず 六二 あさくらのもり 読人しらず

名のりつゝ行かへさにやまなからん
あさくらのもりは我としらなん

新撰社六八 鶴のはやしのもり 観意法師

くまもる井乃本鶴のはちる名をさへてや
私も あさつきの枝といふへき

此哥判者清輔朝臣云あさて
このもりたてはもしれと新撰社

色かはる萩ちりぬれはまや
はしを取りはてよるゝむし
読人しらす
金葉集はきのうたとて
道信朝臣
羽咲萩らやこやこゝかしこにあれ
色よみてそらもなく枝むらのこゝろ
萩
堀川院御時百首うたのうち 山城式 摂津
基俊
なつくともいつかはくさ草かるゝ

こゝ乃え萩ありあけのまよ
建保二年名所百首御製
順徳院
刈てかくこゝのみ萩の夏草は
露わけよせてかれ弱もなきめれ
同
俊成女
麻ともしるこゝ川の萩れ海にちまよ
きてそよりかせの枕まよしりあ
同
忠定
分もゆるこゝのゝ萩のまふても草よ

かくてふかれまよふの川風

同　　従二位行能

暮ありて霧むすほしく立ぬなり
こ川のこ牧の夕暮の秋

洞院摂政家百首歌

望月の駒よかくねをけふの来紫にせき　隆祐朝臣
こ川のこ牧なりのこふるうきさ草よ

千五百番歌合　立秋あつのくるまき　未勅
　　俊成

こらのくのあく野の牧の駒なれも

ことしはこしそてなれりぬを

六帖題　新六二　ゆくのまさき　為家

ゆくの牧のかりれ山のこさすけ
ともとれは文あるしこれつ神

文治六年女御入内屏風駒迎　こらのくまさき　法興　正三位季経

はるくとみやら野牧よ引駒の
まつますおつくね夜のまさき

寛喜元年女御入内京都家　権中納言

宇月くれこらの牧なり引駒の

あはれくなりせきのうちもし

家集 人のもとへいひつかはしける
総州の国すまの関のと　祐挙

なつけるすまのせきの駒なりや
ひくかたなきを忘れざりけり

とし

旅ゆくも海の色かはるこころあれ
いかなるすまのせきなるらん

家集 二月 つくしの関 甲州文字 貫之

都まてなつけるせき川はさしさ原

へるせきの駒すきしきあはれ

家集 六 二首

たつさりしへるせきのせきつあるに馬も
いこれもそうまろくなつけてそこる

堀川院御時百首　源仲実

なつちかう色まるのせきのあられ駒
いたくなしおそしこはあれけり

ふのくせきよりあゐるる百をとえて　万代　大納言兼光

こゑたかるたえゆくせきの月やまの

うへしつ鶉のなくみちもあかりける

田

百首歌よみ侍りける　家隆

山里は海きその小田はあれにしつよ
うけひのみを住きうきれ

建長四年毎日一首歌中にゝの小山田　民部卿為家

引うつす苗の小山田数しくてうつ
るきも民やくるしき

文永元年七社百首歌よりのなかの

月

水井さえの底のまことをひき捨て
よろのすみぬさるへかるらん

同

田をとまへ家をとられすみ山路の
心しきしてねるう苗れ

建長四年百首歌の中　参議為相

いにしへの神代にしろ跡しれは
ひともにねまけあされもしはを

建治百首　藤原為顕

田あるゝれハ田かへしまかする苗代の
みつこそいろにしもゆるかな

堀川院御時百首田家 さうちの山田　権大納言公実

山井もるゝれそしろき門田かり
秋ハねやこそほさめしきれ

寛二年百首山田　皇太后宮大夫俊成

あしねかすむ山田のみのよふりてや
物さひしまる世のかけは見えけれ

寛元年白河殿五十首今　亀山院御製

霞たつ見る春の小山田打かへし
ふくも花とそむしるなりけり　民部卿為家

六帖 新六二 さつき

かさ山のさはされあさの水ゆかに
くらりのさろみといふよなきん

同 新六二 さなへの山田　光俊朝臣

日あかりの浅田の深田のなへけるよ
門らひあまるあをの細くら

同 うゑさなへ　知家

山かけの苗代小田のくろあし
こほりつらしは春をおろすさと
同　三首と　　　　　　　　　　同

夕まくれに垣ねにつらし出田の
ひとりとりてうつ秋のうら風
同　ちかき　　　　　　　　光俊朝臣

うら風に浜田のそはね打なひき
ちやうりかるぬかう尤りせる
同　りさき　　　　　　　　信実朝臣

とり小田の鴫のたつよかりるあらし
おもてゆりむらのしきこさく
寛元之年続後撰百首沼の歌に　　為家

しら河の水も涸すそこ深き
沼のうき田りかるゝとらなむ
新葉川そひ小田を　　　　後徳大寺左大臣

あさきみる河そひ小田のあせつたひ
わかれゆくくるゝ夕く浜くひ飛
新葉集　　　　　　　　　　好忠

草まよふせきのを田をうへそめて
いくとせしまにけふをねかはむ
日吉　　日
里とほくはこふる山田のなりすと
きのふまではちかつよ見えまさりける
貞應元年悠紀方　民部卿為家
見くはなる田の面のあまたに
むかしのひろく道のうちはに
人丸来雅　因縁流林下凡開元次陳　定家

あらしふく田面のかくさきみはつる
せせいとまもの秋やとみうき
家集　早苗をとる田　源仲正
石もみふひくもれのうつ田や
いたくはちよへのさかをきなき
日吉田　　日
五月雨は深田のれまさくこゝろる
なりつゝゆひもとてくさかりん
文應元年大嘗會悠紀方御屏風　つくのさく田　稲春十三　從二位行家

もろしもく神のさへ田にまかれは
二葉よりねはやとりつゝむ　家隆

洞院摂政家百首植あさ
あら川のさむさのあら田にまかせよ
一むらすゝき一夜宿かせ

家集百首中　正徹
こゝさ井るあら田のかはつとけく
沢のくろ岩に鳴かれ

家集とのゝあれさき　頼仲卿

長ゆる小塚のあれ田ことしつくらは
深いさせむなけのなをさへ

家集紫門さきさ　寂蓮　中務親王
せり川や竹田れさるくされるこそ
うまれしかすなとこそ無か

万葉さらさき　寂蓮　高市連黒人
さゝの田へと川なきかはるあゆちて

家集中題
檀ほよくろしと川なきさこそあれ　権僧正公朝

あゆちかき垣ねにちかくまつ田の
かもけの風にさわく嘯かなる

名所寺中　寺林といふこと　賀茂政平

雪ふかくわけすゝりてもみつれ
うき色のこ寺林そのかしこまて

題しらす　保季

あかれ人見えは
むかしこの石貫川によみし鶴れ
千年をかけてあらはし

元仁元年五月会勤るとき人の当　澄実卿

三鴨江の入江の岸をかりきまて
渡への小田はかなくさふめる

後鳥羽院新撰百首歌よみ侍りける　後九条内大臣

清くすむ山をさこのさとへいそくとて
せくろしさうけさこそ孔の川なる

建保元年五月一日会にまかりて　為家

志賀のうらをち渡田れのかに
色はかく見まさも秋さりけれ

あつ女のりなくあらしてやかき　藤原長能

さ経ときよ多めしつかとつまの妹を山
屋まさの浜の名もめかめり

文応元年七社百首寄田家　為家
　　　　　　　　　　　　前右
なれつゝし其の山田の里人も
年よりくらす程をしらなん

同　寄神田　　　　　　同
はふりこや寄神田にひくしめは
ゆふかくるいは万代のため

同　寄神田　大和　　　同
さゝや川末さきかけてちかへの
神田の杉すへハいなほとるなる

同　住吉の神田　摂康　同
すみよしの神の神田の神のまへに
あなたれの駒ハ立ともさかれし

同　すみよしのあら田　　同
住吉のあさ沢水のなかしくも
すみよしのあら田は種まかなくに

同　すみよしの濱田　摂康

住吉の濱田のさとへしらぬこゝろ
ふみ月といふかるなり

嘉元百首 大和 法橋顕昭

我すゝしかるのあら田とおもほく
くぬまよりあひのませつるかな

百首 かもめ 乙田 家隆

三王川乃水上入てくるまてなる
かるの王田を清ミへとるかな

嘉元百首 慈鎮和尚

風乃音は鳥羽田の面かきたえぬ
よるの浦りかり秋やこゝろから

家集 乙田 清輔朝臣

朝露のゆへかれぬ秋田の風は
むすびおきてるかちうされ
けふはあまよりそゝもるに
うつとのく御雨の御かなる
田よ雨のおもしく立かるゝこ
てこゝこ

親経

承保三年十月源頼仲卿下出雲国名所三首人
出雲なるちりのいりえのすゑにして
よむともつきし君かよはひを

上野 東歌 万十四 よみ人 上野人丸
みつけのさみさのすのむすへに
こいはゝたえはいふちかん

秋しられ 万九 伏見の田居 よみ人しらす
大くらの入江ひゝくなりいめ人の
伏見の田井にかりわたるらん

千載 秀歌 よみ人
夕月夜ハ伏見の田井にあまりて 隆信朝臣
夜ふけて渡る宇治の川流

永久四年百首歌三首人 宇治茶代 伏見田
時しくれは田子もいとなし伏見原や 仲実朝臣
伏見の野田りをつくらひつゝ

仁安三年二月書陵る三首人 海路 顕昭
さ夜ふけて伏見の野田もあるゝかや
宿かりかねて鳥なかるなり

百首御会の歌に　同　清輿　後嵯峨院御製

霞こめし野畠のうへそてよそく池の

汀よりなすひく苗のしらさ小

吉き御方あへの畠　後河中務卿親王

ゆるくとれあくの田畠乃むぎ苗よ

頃おもてなくわかしこされ

畠

六帖題歌五二　信実朝臣

まめまくなる志ろ田にはしくる蕎麦白畠

い川あるしろ乃こうめ地まきん　正三位知家

同　同

いそまつるりある園に残さけ花

もえしけまてもとる無なかかりり

園

宝治二年百首　隆祐朝臣

西山まはは園中の道にたえてしある

園生あらけこのよの里人

承久二年内裏歌　民部卿為家

あすよりは人もたつねむ山さとの
園生のかきね花さく夕風　寂蓮法師

千五百番哥合　かきねの哥
今よりやあくまて花をちらさせよ
なるてふかきの園をとふて

嘉元年中　むめの哥　好忠
山里の梅の園生より春きては
まつひとそとふひとそとふ心

光台院入道二品親王家五十首
竹の園の　従二位家隆
竹の園まかきの菊もふりにて
いく千世かけてねまさてさかえなん

日吉社の花の哥　月
湖の海や霧吹きしろき夜の
なかにもいくしほのしらぬなき園

永久四年百首なしの哥　仲実朝臣
いつこもみるしかまのそのにそて
あひそてる一神のこ月の光

畑

百首御哥　外山畑を

順徳院御製

哀なる外山畑乃かりの庵
柴の煙の立つけても

同集　山家秋のこゝろを　後九条内大臣

山里は秋のよる畑あれにけり
むしもやすめのゆふへをせん

寛元新六二　やけ山を　為家

風わたる焼け山きしのすそに
ゆふへさ梅あれしり　ゆき

同新六二　をゝ　信実朝臣

梅かえのかれし乃こゑるらつかあ
くれてゆるさとり畑の焼け山

同新六　同

山もとに畑焼けたつ夕暮を
立さいかくれ煙もともされ

宝治二年百首　夏草　同

かた山の畑のそはかれしきかりの
くゆ○よりもかな志けるる夏草よ

内裏百番歌合に　前大僧正行意

人のよも里はへしまたにかよふか
山ちの末は志川の庵は嬉
此歌瞬りよむく山をこゆ
よそて言ゝ

霞

久安六年六月家成卿之哥合　前大納言隆季

風ふけは花なきよりも匂くるゝ花よれ
いつとの花のいろあひらん

久安百首　花園左大臣家小大進

よろつよもいまはじめといはふか君か代よ
千歳そかそへし天地ともにも

六帖題　新六二　衣笠内大臣

もろこしも我か心より知れ
いにしへの中に富はあれとも

日日

正三位知家

清きわか行すゑをはるかにしめす
あつるいにしへはてなかるとも

同　　　　　　　　　　俊実朝臣

岩のうへにくしきもなき松を
人の齢るをいはひけるかな

同　　　　　　　　　光俊朝臣

岩乃かけにいはふる中にても
いくよの風のこゑきくらん

同入道摂政家二百首歌の　　為家

あふくいはふ岩むろにおふる年ふる
君かいくよの千歳くらん

宝治　新六二

同

谷かけにいはふる岩のとしなみて
むかしの跡やみえくもなり

同　　　　中務卿親王鎌倉

あやまちはなきをよ岩のかけまち
よ川まぬあやをかむむかし

同新六　　　　為家

川こえしのいはかねたすけ岩かけて
ふるひいはまもとしふるのよや

保延元年家歌合に石の祝　大蔵卿行宗

君か代はあまくたりこし紀なれは
ちくの巌もことはりなり

石

百首御哥寄石祝　土御門院御製

なさいろは石よりもかたくつきすまは
ひらきえぬ人は其心なりけり

祝の心を　通房

君か代乃とよは紀石はあまくたり
しめ紀神もいのりつゝまつるせき

建長四年百首哥合　従二位行家

君か代はさゝれ石もあはし岩の生
と紀はなれ石なれともと紀はなるよ

寛元新六二　信実朝臣

わか心さゝけゆるきなき石を
りあふみ乃すまえ出てき

同新六三　同

山より石乃なかれ下りて出けるし

滝乃小舟心しつかなりけ

弘長元年百首　日

大井川ゐせきの石を君かため
ひろひあつむるは千代の数かも

仁安二年八月経盛卿家歌合月　清輔朝臣

小倉山ふりの水のはまいしを
数へくもなくてらす月かな

音書無人　家隆

いはね海ね塩をく小浦をちれなの
くらけて知をそふよろつ郷

宝治百首　民部卿為家

奥乃石乃涼のさゝれ石あつめれは
ゐましてよ世を知れきこ祇郷

天福元年九月賀茂社歌合　家ニ合

公あてにまつしの浦よりふみの
いそかしなりしきよしやまて

天延三年一月清少納言家集　左歌

君の代の数よりかゝやくらしぬめの

うきよをの山ときゝつゝなすわる哉

後宇多院入道前京極家百首歌　禅性法師

秋きつる風吹上の濱の浦遠くや

定まらぬよるの山の鶴りなくよ

恋歌中に　後九条内大臣

石にしも流れちぎりはあひぬらむ

むちうつ人はおほゆる世となし

述懐百首歌　皇太后宮大夫俊成

石をうつ光のうちによそふなる身

此月のひかりをなほよるかけにかくれん

文治三年百首歌述懐　於還御院殿定家

こす波のゆくへをとひて濱風の

ふるき浪もきえせで流

千首歌　為家

我とをねりよの吉川中々にまり

名にしおはゝ立すむ山の庵

題不知　西行上人

ねかきいる池水にも流るゝそてなか乃

あまてらすこともなをし汀なる

永久四年百首　　俊頼朝臣

君さかえあまてらす人乃心はえ

つきありてたえもせぬるかな

同　　源兼昌

君か代のためしにかゝらのかね

はや加比川なかれ石もしらねは

同　　俊頼朝臣

君か代乃千年はひとつかさねの

ひかりくもらむかきりをそまて

同　　同

君か為ゆきのあけてやひつる

ちひろあれ石よ浦のあふへき

けふこそ伊勢の海歌ぞ待るる

はなさくら乃石合こりすとも

せきせ山ひきするちいささき

はらしを十つくりて石乃

ゆかさはまてむとつりしさき

待つと云ふ

松と二まつかひありて　十　能因法師

石となりけるつまを人ならは

なほたえぬ恋路乃末もまちわひぬらん

鏡しらぬ上の林にたの　ならん人しれ

あはれめてまさりこし人をまつとは

石となる我身ならし成てそぬへきさ

永万二年中宮亮重家歌合　藤原頼保

こひしさもいつまてつまよつけてなくさむ

我身もなりぬ世やまさらん

此歌判者俊成云右乃

うちみつゝ我身をも山

なとひゐるみかくさき義を

ふるへし然れとなりけることは

わしハ望夫石とかけるにや

あらん其うへそ地あらへし給

しかし武昌北山上有望夫

石其状如人立昔有貞婦

ふたりかりかの人つこを男おきさまさ
ゆきかへり科をおしえて乃
山の色ありとて見て支残
こゑかりきるありにしてゐ
てられたとなりかりけれハ
涙川に流むかハおなし色
しとゆはしぬともしてゐ
なるそいつるゝ小侍従めあとき
小侍従

あふれハまさるけさにたましひくハ
鳴をやめ人の名とかりきれ
此歌判云清輔云ほと文字こ
物こそ秘ゝへ行をこそ物也
こゝにこそあり女の名あり
なきるなり恋をして身あるよ
ハあらねハ恋れ并に叶ハね
よし中人も侍かめと思ひし
もるもつ物ことを侍る〇てい

よるかなしても定家まよう
侍るめるゝ見てはあらす
那く人と侍りあやしきことゝ
待賢門院堀川
名所百首
あひ見てと心をよりかゝりひとの
吾てりやのそも哀しるらん
名所月　上西門院兵衛
清見かた雲中のかひのいゝて
打もねぬ清きあやしある人

月
花園左大臣家小大進
我恋は山下のはのしたにての
あはて浮ぬかるゝも知人ぞなき
河路述懐
後京極内侍
ふへしてよりかけさる石なれは
うらふきもなくし川をわたるる
永久百首歌
仲実朝臣
白妙の垂川まれ雲雀遊をそ
まくらふの石をかむしかもてう

同

藤原忠房

抑へてそうけもやらまし我身より

ちひおのえれあくひかりまされ

深遠の歌判中偏にをさへたる由

我思ふもちりの名よあくまとも

大流(?)は流(?)

あふりかきなとのまよく

更に歌の判は為し文

大空り川をも流るこ流れ

衣き肉(?)のぶ

思ひとなるらも君ハこそ打

此事判云先後如下云載因云

無之擇懐迷我於て如何侶云

家長朝臣

ちるをやまひ入えのましハ

なみにそ棹の下に呑つらむ

同

り我かれのこ入口のましハ

我さそ半ーの行思ふまる

まことの孫なるに　いけるかたちやある
光徳弟下
この山の中に此石のこましましと
いふあるに光徳弟下麻呂
社よりまうて侍るに行く
の御前とて不開の御殿より
も二三町計東此山の中より
ゆりしさとて御殿まて御神
宮とよみて見よ奉るこの際
ありやなきと思ひ侍りける

石ありとて御覧のうし給ひ
竹の中に入られ給ひけるを
取りあてまゐり此時御本てしらく
より竹の中此石のうへて座禅
をせしを給ふ　万葉集なりし石
のこましこふ見也よみ人知らず
小さくかり給ふとてこここ
よみ人しらす
読人しらず　万葉
花すすきのつけたる水のそこに清て

志らくもとあとゝへぬる

後嵯峨院

こえし奥のしら石志らし
やまふきのすさまし哉

家集　　　同

ゆきすまさかぬ太うら山風ふかれ
よ年とてもかはらぬしらなみ

細川

弘長百首

よみ人しらす

住乃江ハなみまくらよりふる志もかす
われならぬ人の君ハ忘れする

弘安元年百首歌　従二

権大納言為氏

浦とほく霧はかゝれと塩風の
松しま吹上のはまの

従二位為教

うら風や吹上の浜の松かせに
ひとつなりゆく

又西行の歌

日本政府図書
昌平坂学問所

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan